



號六十七第
 月一年九十和昭
 行發日五十月
 行發日五十月
 錢五部一價定一
 錢十六(共稅)分年
 一才田杉 編兼行發
 園公谷比日區町敷都京東
 社信通盟同 所行發
 (頁八〇〇二 出二 日第)
 (八〇一東東)

年頭の辭

決戦第三年を迎ふ

社長 古野伊之助

五千の同志結束敢闘

今朝ここに本社の同志社員諸君と一堂に會すると共に、マイクを通じて、わが社の専用線を通じて、北は北海道、南は九州、さらに遠く滿洲の各地に、社員諸君を一連の繋りに集めて、この決戦第三年の新春を迎へようとしてゐるのである。

東京は例年に比して、いくらか暖いらしいが、天候は晴れるか、曇るか、わからないやうな空模様である。この新春を迎へる各地の同志五千の同志諸君の姿も亦、様々であらうと思ふ。

同じ日本國內においても、また滿洲においても、事情はいろいろ異つてゐると思ふ。或るところは非常なよき天氣であらうと思ふ。或は雪、雨などの中に、この新年を迎へる諸君もあらうと思ふ。そ



れどころではない、遠く歐洲の天地において爆撃の音を聞きながらこの新春を迎へてゐる同盟の同志もあらうと思ふ。また遙かに南方の防空壕にもぐりながら、この決戦の新年を迎へようとしてゐる諸君もあらうと思ふ。

事情は種々様々である。環境はいろいろであるが、この五千の同志は一致結束して、皇國日本がいま當面する決戦第三年、この年こそは、どうでもかうでも、敵米英を捻ぢ伏せて、最後の勝利を獲得しなければならぬといふ決意に燃えてゐる點においては、全く一致してゐるのである。

敵米英の謀略

何故今年は決戦の年だといひ、或は決戦の年だといふか。歐洲の情勢を眺めてみても、過去數年の血戰死闘の結果、歐洲の中樞部がつちりと握つて、しつかり東部戦線の防衛に任じてゐるドイツの姿が眼の前に浮んで来る。あらゆる血戰死闘をもとせしに戦ひぬいて來てゐる盟邦ドイツの姿が遙かに浮び上つて來るのである。

敵米英は去年一年、やれ第二戦線、やれイタリアの崩潰と頻りに宣傳をしモスクワ會談、テヘラン會談、カイロ會談といろいろの政治謀略にもかかはらず、今日なほ中立國の足許を崩すことが出来ないものである。米英としては、今年こそは何とか第二戦線の問題にも形をつけなければならぬ絶対的な破目に陥つてゐる。

ドイツの戦争努力

これに對してドイツは鐵壁の防衛陣を張つて、歐洲共榮圏を確立すべく必死の努力を盡してゐると思ふ。その重點がもろろん東部戦線的情勢如何にかかつてゐる。

新年の辭

大東亞戰下第三回の新春を迎へ日滿一億五千萬國民が必勝の信念愈々固きをみるは御同慶に堪へません。我が滿洲國においては今年こそは北邊の護りを磐石の固きに置き、刻下の至上國策たる増産増大増産の大方針を一意戰爭完遂の覺悟の上に體然として打ち樹てねばならぬと慨然とてゐますが、同盟國間の關係についても愈々緊密の度を加へ敵敵態勢を更に強化し、相携へて思想戰を勝ち抜く決意を新にするともに、古野社長以下全同盟同志の御健闘を祈るものであります。

松方義三郎

滿洲國通信社理事

とは明かであるが、この東部戦線的情勢も、果してロシアの反撃を粉砕し得るか、自己の防衛陣を守り抜くか、米英の第二戦線の試を粉砕し得るか、これに押されるか等々の事態は、恐らくはここ數ヶ月を出でずして事態明瞭になつてくることと思ふ。

しきりに亂れ飛ぶ全世界のそれぞれの立場から來る宣傳謀略、思想戰の報道は入亂れて渦を巻いてゐるけれども、すべてこれ儼たる事實によつて、事は決せられる。

勝利の決は飛機の量

勝つて東亞の天地を眺めると、前線に戦ふ同志諸君が入替り、立替り歸つて來て傳ふるその實狀によつて前線の模様は極めて明白であるが、アメリカが總力を擧げて押寄せて來る總反攻も問題はただ一點に歸着したといふことが明白である。

即ち飛行機の數である。飛行機の數さへ充分にあれば、アメリカの反撃作戰のときは、一たまりもなく叩き潰せることが明白になつた。

前線に戦ふ將兵の士氣、飛行機操縦者の手腕等が斷然卓越することとは、われわれの同志が前線から歸つて逐次報告する通りである。飛行機の性能、爆撃の威力等々、何等恐るものはないのである。

しかして一にかかつて國の總力を飛行機の増産、船舶の増産に集中する鍵は、もう既に政府當局も充分理解して、どしどし、その手段を講じてゐる。

この昭和十九年が決戦の年であるといふことも、われわれのこの分野における生産力が増大すればアメリカの總反撃作戰を破滅撃滅するのはいとやさしいことであるといふことが明白になつてゐる。

ビルマから來る反撃もあらう。またアリューシャンからも窺ふことであらう。支那の本土を足場とする反撃企圖も行はれるであらう。

確乎たり軍略的態勢

願れば決戦第一年に確保し得た軍略的態勢は世界に冠たるものがある。南方の各地をめぐる諸君は如實にこれを體驗してゐることと思ふ。數千、數百の島は、すべてこれ永久に沈まざる戰艦であり航空母艦である。その島々を取巻く大洋は四通八達の鋪裝道路である。今は徒らに足許の小きな事象に眩惑されて、物資の不自由とか、輸送の困難とかいふことに、とはとほ愚痴をこぼすときではない。眼を開いて南方の天地を眺めてみれば、この大東亞戰爭第一年に於いて確保し得た地域は、全世界が總立ちになつても、どうすることも出来ない必勝不敗の態勢が既に確立してゐることを知るであらう。

南方の島々こそは不沈の戰艦、航空母艦であると同時に、世界に誇る富源を蔵する寶庫である。ただわれら一億國民の決死の努力によつて、これを一つ一つ戦力化する問題が残されてゐるのみである。

これに向つて、われわれは着々とその最善の工夫と眞剣な努力を費し、既に第一年度に確保し得た必勝不敗の地盤に立つて、これをすべて戦力化し、米英の總反撃を破滅撃滅しようとするのである。

しかして過ぎ去つた第二年度になし得た實績は何であるか。米英百年の侵略の痕跡を悉く根柢から覆して、土臺から顛覆して、聖國の大理想に基く東亞の共榮圏を一つ一つ實現したのである。

しかしながら我等一億の皇國國民は、鐵石の團結をもつて、あらゆる方面から來るべき、この反撃を粉砕して、東亞の共榮圏、否世界の新秩序確立に向つて、一路奮進する年こそ、この年、昭和十九年、皇紀二千六百四年であらう。

確乎たり軍略的態勢

願れば決戦第一年に確保し得た軍略的態勢は世界に冠たるものがある。南方の各地をめぐる諸君は如實にこれを體驗してゐることと思ふ。數千、數百の島は、すべてこれ永久に沈まざる戰艦であり航空母艦である。その島々を取巻く大洋は四通八達の鋪裝道路である。今は徒らに足許の小きな事象に眩惑されて、物資の不自由とか、輸送の困難とかいふことに、とはとほ愚痴をこぼすときではない。眼を開いて南方の天地を眺めてみれば、この大東亞戰爭第一年に於いて確保し得た地域は、全世界が總立ちになつても、どうすることも出来ない必勝不敗の態勢が既に確立してゐることを知るであらう。

南方の島々こそは不沈の戰艦、航空母艦であると同時に、世界に誇る富源を蔵する寶庫である。ただわれら一億國民の決死の努力によつて、これを一つ一つ戦力化する問題が残されてゐるのみである。

これに向つて、われわれは着々とその最善の工夫と眞剣な努力を費し、既に第一年度に確保し得た必勝不敗の地盤に立つて、これをすべて戦力化し、米英の總反撃を破滅撃滅しようとするのである。

しかして過ぎ去つた第二年度になし得た實績は何であるか。米英百年の侵略の痕跡を悉く根柢から覆して、土臺から顛覆して、聖國の大理想に基く東亞の共榮圏を一つ一つ實現したのである。

(以下次頁(續く))

古野社長年頭の辭

(前頁より續く)

儼たる東亞共榮圈

これは米英が種々様々な會議において、やれルーゾヴェルト、チャーチル、スターリン等々を介して恰も戦争が終りを告げて、戦に勝つたかのやうな錯覺に全世界を陥れるために矢張り早に出してくる空證文の宣言や、聲明とは異つてゐる。

ビルマが獨立したことは儼たる事實である。フイリピンが獨立したことも確乎たる事實である。インドネシア人が政治に參與してゐることも明白なる事實である。隣邦支那が治外法權を撤廢し、租界を接收して立派な獨立國となつたことも、これまた現實の事態である。

かくのごとくして一々實踐躬行したその事態を取纏めて、大東亞宣言として東亞十億の決意を中外に表明した。アメリカが議會において支那人の入國禁止の條令を解いたり、治外法權を撤廢したり、自分の借金を他人の金で支拂ふがごとき卑劣な虚偽をやつてゐるのではないのである。儼たる事實、確立した現實に基いて東亞の共榮圈は生れたのである。

しかしてこの事實に基いての東亞共榮圈建設の原則、これはそのまま移して、世界新秩序の原則たるべき目標を世界に宣言したのである。

目的實現に總力結集

決戦第三年に殘されてゐる仕事は、ただこの必勝不敗の軍事的立場に立ち、古今東西を通じて認めざる大原則、大理想に基いて、世界新秩序確立の目標に向つて、國民一億の總力を結集して、米英が

遠く一萬キロの補給路をたどつて再び東亞の新秩序を攪亂しようとする、この無益な遠征軍を徹底的に撃滅粉砕する、これだけの簡單な仕事が残つてゐるだけのことである。

地盤は確固不動のものが出來た。目標は古今東西を通じて、永久に世界全人類の誇たる大理想、大理想が確立したのである。

總力を掲げて、この目的實現のために、世界制覇の野望が諦め切れないで蠢動妄動する米英の戦争指導者共の迷夢を叩き破れば、それだけのことで世界の永遠の平和と、人類永久の安定が確保されるのである。

而もこの意義ある大事業が、われわれ皇國日本に生を享け、この千載一遇の時期に、皇國日本の巨民として、それぞれの部署に働いてゐる一人一人の双肩に課されてゐるのであるといふことを考へるときに、われわれは無上の光榮と感激に満ちつつ、一意その職分の奉公に邁進しなければならぬといふ決意を、いよいよ固く、且つ新しうせざるを得ないのである。

思想戦に勝ち抜け

ここに改めてわれわれ同盟の同志五千が分擔する職責の如何に重且つ大であるかは繰返すまでもないことであるが、内にあつては一億國民の總力を結集して、戦争目的の完遂に突進する姿を固めるべくその基礎をなす思想戦は、われわれの双肩に擔つてゐる重大責務である。

また同時に、外に向つては敵米英の戦争目的の矛盾撞着を徹底的に指摘し、これを糺弾して、全世界の前に彼等の野望を粉砕し、彼

等の戰意を撃滅して、この大東亞戦争の決勝の年、あらゆる努力を傾倒すべきである。この對敵、對外思想戦の中樞機關として、われわれのなすべき任務は數ふるに違ない程である。

ここに繰返して述べる時間は持たないが、過去二ケ年にわたつてあらゆる機會に述べて来た私の言説を、もう一度この機會に振返つて貰ひたい。

かくして今年こそ、敵米英の戰意を粉微塵に叩き潰して、日本の世界新秩序の理念を全世界に闡明

すると同時に、敵が必死となつて維持せんとする世界舊秩序の矛盾撞着を暴露して、この對敵、對外思想戦に徹底的に勝ち抜けかねばならぬと考へる。

この部面に對して、それぞれの部署において、所を異にし、時を別にして、全國津々浦々に、東亞の各地に、世界の隅々に、戦ふ我等同盟の同志五千は、この決勝の一年を戦ひ抜く覺悟を固めて頂きたいと思ふ。

(昭和十九年一月一日日本社新年拜賀式に於ける訓示)

戦ふ南冥諸島の活躍現況

マカッサル支社長 猪 伏 清

昭和十八年秋バリックパン、バンジェルマシンの視察する機會を得たが、南方遠く祖國を離れ、あらゆる不便をしのいで日夜活躍するわれらの同志の尊い姿に接し、感慨ひとしほ深きものがあつた。先づ九月六日マカッサルを出發してバリックパンに向つたが、ここでは十三日まで滞在、八木支局長以下の歡待を受け、支局の活動を具に視察した。次いでバンジェル

マシンの赴き、ここで九月十四日から十九日まで滞在、それよりバリックパンに渡りシンガラジャ支局に直行、九月二十三日から二十七日まで滞在、乳房にあけられるバリックパンの夢はみる由もなかつたが、軍官民各方面より同盟ニュースの好評を聞き、この點に關し大いに誇りを感じた。

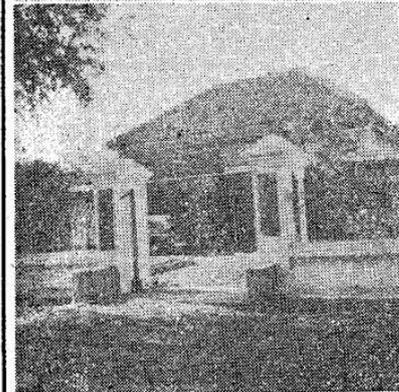
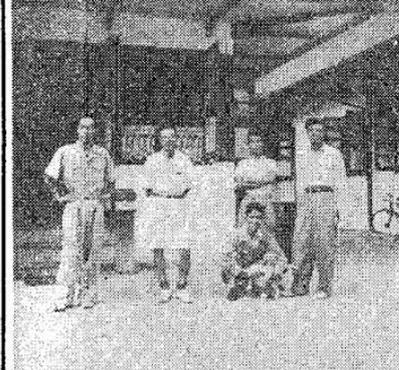
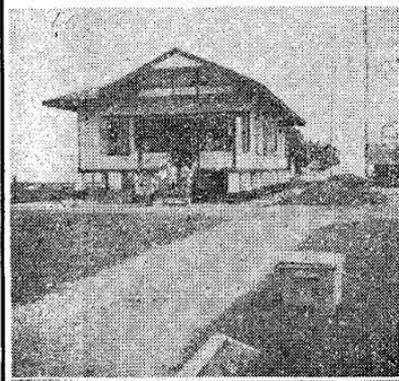
管下三支局の現況視察を終へてさらに事務連絡打合せのためジャカルタ支社およびバンドン、ストラ

マシンの支局は昭和十八年二月開局をみたが、田中支局長以下支局全員一致結束、通信發表部面も取材活動も活潑で、同盟の聲を上げてゐる。支局と支局員宿舍は隣合せになつて至極便利である。また裏側には第二宿舍があり二人一室一寢室を確保してゐる。編輯關係の仕事も、電務關係の仕事も申分なく、電務では現地住民職員中より三名を選抜してオペを養成してゐるが、好成绩を挙げつてゐる。

シンガラジャ支局

バリックパン北岸のシンガラジャの支局を訪ふ。支局は昭和十八年五月二十七日開局、黒崎支局長以下の死に物狂ひの活動で同盟ニュースの聲價高く、本格的整備の實を擧げつつある。堂々たる支局建物を有し、宿舍も二人一室二寢室ながら、この町でこれ以上求めることは或は無理かも知れぬ。自動車も四臺もち、公用並みのガソリンを確保してゐることは羨しい。讀賣のバリックパン支局の所在地デンパッサルに取材關係の休憩所を設置してゐる。

【寫眞説明】 上はバリックパン支局全景、中バンジェルマシ支局支調、下はシンガラジャ支局の全景



ここボルネオ南部のバンジェルマシンの支局

有線から無線へ

編輯局次長 長谷川才次

受信手段の歴史

大東亞戦争が始るとともに、外電を受ける仕組みが、すっかり變つてしまつた。主要なニューズ源であつたニューヨークやロンドンが敵國の首都であり、敵國内の同盟支局は全部閉鎖されて、支局員は抑留されてしまつたのだから、外信部としては全く新たな構想に立つて、情報蒐集の施策を工夫せねばならなかつた。

しかし矢張り「自然は飛躍しない」。戦争といふ重大變動にもかかはらず情報蒐集の施策は「突然變異」の法則によらず、「創造的進化」の過程を踏む外はない。

今から二十年ばかり前にロイター通信社の古い記者だつたヘンリー・コリンズといふ男が、ロイター通信社の發展を叙して、『傳書鳩から無線へ』といふ書物を出したが、通信社の發展は特に對外的な部面においては傳書鳩から有線電信へ、有線から無線へ、そして最後には電信同報へといふ経路を辿つたといへよう。

外信部の仕事の變貌

記者が聯合通信社に入つてから早くも十五年を経過したが、この十五ヶ年間が恐らく同盟通信社史の一番面白いところでもあらうし特に外電の面からみて『有線から無線へ』、外國通信社依存から「自主的通信網の確立へ」といふ、大事な過渡期を構成するのではないかと思ふ。しかもこの過渡期が大東亞戦争によつて大きな轉機に變つたのだから、受信の面において

も、取材の角度についても、編輯の方針に關しても、外信部の仕事が開戦前とは非常に違つて來たことはもちろんだ。

記者が當時の聯合通信社の外信部で、初めてスケレトンと呼ぶ英文電報をみせて貰つた當時、電報は大體ロイター通信社の上海支社から長崎、上海間の海底電線に入つてをり、時々ニューヨークから來る電報はコマニシャル・ケーブルといふグアム島經由の、これも海底電線ではなかつたかと思ふ。

當時「E.O.W」と呼んでゐたアメリカからの無線電信は早いことは早いだが字が崩れるのが困るといふことを、先輩の人達が話してゐたのを未だに記憶してゐる。

そのうちに一年くらゐたつたらもうアメリカからの電報は全部無線になつてしまひ、事務電報だけでもいから海底線を使つて欲しいと電信會社が當時の部長に懇願してゐたのを、これ亦うろ覚えに覚えてゐる。したがつて太平洋の方は可なり早く有線から無線へ振り替つたわけだが、歐洲の方はロイター通信社が當初は大東亞電信線となかなか止めなかつたので、可なり遅くまで有線が生き残つてゐた。

歐洲電とハヴァス

即ち當時の聯合が歐洲ニューズについてロイター通信社に依存してゐる限り、歐洲からの電報は飽くまで有線に頼る他はなかつたがエチオピア戦争の前後から一面に

おいてハヴァス、D・N・B兩通信社が、歐洲ニューズを直接東亞に持つて來ることに躍起となり、他方A・Pが所謂ロイター通信聯盟の枠から脱け出して、自力で歐洲ニューズを取り出した結果、同盟に入るロイター・ニューズは大體英本國とカナダを除く英自治領とに限定されるにいたつた。

以前にはフランス内閣が變つた時などバリのハヴァス本社がフランス語で簡單な第一報を直電して來たが、電信線の關係上パリ、ロンドン間をテレプリンターでつなぎ、ロイター社の海外局が極めて簡潔に東京に打電して來るのには時間の上で絶対に太刀打ちが出來なかつた。この状態を打破したのがハヴァス通信社の電信同報だ。

當時東京にゐたハヴァス特派員ジュルジュ・アルソー氏は實に仕事に熱心な人で、何であんなに躍起になつたのか分らないが、ハヴァス電信同報を聯合通信社に「賣込む」の一生懸命であつた。今こんなことをいふと笑れるだらうが、一日四回とか五回とかいふ定時の電信同報で刻々一吋商賣のニューズをとることは一寸商賣の一寸しなこともでなしに違つて

外は出るし、同報電話で一秒早くつた、遅かつたと苛烈な競争を續けてゐた當時だから、アルソー特派員がいくら賣込んでも、態よく捌ねつけて誰も相手にしない。

古野社長の英斷

結局業を煮やしたハヴァス本社ではフォンツノア外報部長をパリから態々東京へ派遣し、震災當時のパラックだといふアルソー特派員の家で晝飯を食べながら古野社長とフォンツノア外報部長、アルソー特派員に記者と四人でハヴァス電信同報をとるか、どうかを相談したわけだ。

當時内容の上からいつても、ハヴァス社のニューズなど當にならなかつた考へてゐたし、且つ何百圓でも無駄な電報料を使ふのが惜しかつたから外信部の仕事をしておいた記者としては社長が何とか斷つて呉れるのを密かに期待してゐたのだが、話が始めると早速社長が同意し、英文で毎日八百語づつハヴァス放送を受信すると約束してしまつた。

もちろんハヴァス通信社としても非常な英斷で、それまでアルソー特派員など「フランス語では困る」とこちらいへばビスマルク公でも國際會議ではフランス語を使つたではないかと逆襲する有様であつたが、古野社長とフォンツノア外報部長との會談でこれら一切の懸案は忽ち片付けてしまつた。

今日では誰でもアメリカ語に所謂「モリス・キヤスト」(電信同報)を知つてゐるが、同盟通信社即ち日本新聞界が電信同報による情報の蒐集を開始し、外電關係の仕事を重大轉換を遂げたのは全く古野社長のあの時の英斷の結果だ。

ハヴァス電信同報受信

バラック會談の叙述が餘り長くなり過ぎたやうだが、恐らく當の社長はこんなことを、とつくの昔に忘れてゐるだらう。アルソー特派員は喘息から胸を患つて昨年ピレネー山中の療養所で死んでしまつたし、フォンツノア氏は元氣でマドリッドか、どこかの支局長を勤めてゐると聞き及んでゐるが、これ亦當時の取極めが日本新聞界にどんな役割を果たしたかなど考へてもゐないだらう。こんなことを考へてゐるため横道に外れたが、後日の參考になるかも知れぬ。

かくして始められたハヴァス社のモリス・キヤストは後から考へると随分思ひ切つた遣り方で「電信同報」とは名ばかり、もちろん

サイゴンやハノイ、上海等のハヴァス支社局が受信してゐるには違ひないが内容は全く同盟相手、言葉もそれまでフランス語を同盟向けから俄然英語にし、更に甚しいことには當時のバリ特派員井上勇君の特種ニューズ、早川雪洲の特種、シヨパン・コンクールにおける原智恵子女史の活躍等々まで全部「電信同報」に入れて呉れる有様である。かくてハヴァス社のモリス・キヤストは、その後間もなくアメリカとの間に開始されたプレス・ワイヤレスの先驅といつても差支へない。

獨逸と米國の放送

もつともハヴァス社のモリス・キヤストの受信を確立するまでには少くとも二年の歳月を要したと思ふ。遞信省とも何遍交渉したやうに相談してバリ本社に渡長や放送時間を變へさせたり、實に苦心慘澹たるものであつた。

それに比べればサンフランシスコと東京間は樂で、プレス・ワイヤレスは當時ニューヨーク特派員の岩本清君が熱心にニューズの選擇に當つて呉れたため、内容もよく受信も可なり安定し、受信出來ぬことなど年に二、三回くらゐではなかつたかと思ふ。

パリと併行してD・N・Bもベリンからほぼ同様のモリス・キヤストを始め呉れ、當時のベリン特派員安達鶴太郎君が色々ニューズ放送の編輯に骨折つて呉れたが、當時既にD・N・Bではヘル・デーンスト(ヘルシュライパー)による通信)に力を入れたので、D・N・Bのモリス・キヤストは正直にいつてとうとう物にならなかつた。

今日では外國情報と餘り關係のない關係通までヘルシュライパー

を知つてゐるくらゐだが、當時話を聞かされた際には全く吃驚し、八年前D・N・Bのワイヤセ支局長が現物を本社から取寄せて貸して呉れたのに何とも使ひやうが解らず、猫に小判で返してしまつたのも今から考へれば全く隔世の感も免れない。

ロイター電信同報

最後にロイター社の電信同報が上海のロイター支社は約十年におたる研究の結果、大體受信出来るやうになつてゐたのだが、東京ではどうしても受信も出來ない。ハヴァス社と違ひロイター通信社は上海でこそ金儲けが出来るが、東京では單に同盟(ニューズ)を引渡す以外商賣がないので、指向性アテナも昭南を中心とし、せいぜい上海がらゐるが目標だ。

記者は滿五年間ロンドン支局に在動してゐる間、ロイター通信社の無電部長フリットウッド・メイと何遍この問題で交渉したか知れない。ロイター放送受信について本社に書いた手紙だけでも百本近くと思ふが、大東亞戦争が始つてから滿二年を過ぎても依然ロイター電信同報の受信に苦勞してゐる

書き出した際には各地支社局の皆さんに外信部の仕事を知つて頂くために大體大東亞戦争開始後一、外信部がどうして外國情報を知つてゐるかを毎日どれくらゐ蒐集してゐるか、これらの情報を外信部並に情報部が、何人くらゐで毎日何時頃からどうして處理してゐるか、新聞紙面の少い際あんなに澤山山外電を出すのはどういふ譯か等々を簡單に述べ、最後に『海外電報』版の宣傳をしよと思つてゐたところ、柄にもなく昔癖で割られた紙敷を使つてしまつたので、尻切れとんぼのまま残念ながら筆を擱く。(昭和一九・一九)

辞令

名古屋支社 永松泰次郎
 新義州支局長を命ず
 名古屋支社業務主任 橋 敏夫
 名古屋支社經濟部長兼業務主任を命ず

局長副参事 久野 茂男
 バン支局長兼務を命ず(十二月三日附各通)
 西貢支社長参事 小松 利一
 プノンペン支局長兼務を命ず(十二月十三日附)

關門支社長兼 塚本 數男
 下關支局長参事
 關門支社長兼下關支局長を命ず
 關門支社通信主任 小川 恒次
 門司支社通信主任を命ず

戰時調査室勤務(上海駐在)を命ず
 参事 中村 農夫
 参事 青木榮次郎
 總務局勤務を命ず
 副参事 大塚 嘉次
 同 坂田 寛藏
 同 永由 君人
 編輯局勤務を命ず
 同 磯田小四郎
 聯絡局勤務を命ず
 同 中村 信

支社局異動

臺南支局移轉

臺南支局は昭和十八年十二月二十八日左記に移轉した。
 臺南市大正町三丁目六番地

小樽支局移轉

小樽支局は十二月二十九日左記に移轉した。
 小樽市稻穂町東六丁目十九番地
 (北海道新聞社小樽支社内)

經濟部勤務を命ず(二月一日附各通)
 漢口支局勤務社員 中原 一鴻
 中支總局勤務を命ず
 中支總局同 南 金輔

漢口支局勤務を命ず(十一月十三日附各通)
 同准社員 浦野 晃子
 漢口支局勤務を命ず(十一月二十五日附)
 經濟部勤務社員 鈴木 四郎
 經濟部勤務を命ず
 經濟部同 門脇 誠

經濟部勤務准社員 山本 千代
 石引 春江
 同 田中 ヤス
 同 坂井つる代
 編輯局勤務を命ず(十二月一日附各通)
 編輯局勤務社員 清水 國彦
 同 山本 義鷹

同 望月 七郎
 同 岩崎 忠治
 同 中野目正子
 同 金子文次郎
 同 伊東 房麿

同 岩崎 忠治
 同 中野目正子
 同 金子文次郎
 同 伊東 房麿

同 岩崎 忠治
 同 中野目正子
 同 金子文次郎
 同 伊東 房麿

同 岩崎 忠治
 同 中野目正子
 同 金子文次郎
 同 伊東 房麿

同 岩崎 忠治
 同 中野目正子
 同 金子文次郎
 同 伊東 房麿

同 岩崎 忠治
 同 中野目正子
 同 金子文次郎
 同 伊東 房麿

同 内堀 正一
 總務局勤務を命ず(十二月九日附各通)
 平壤支局同 今泉善次郎
 聯絡局勤務を命ず(十二月十日附)

聯絡局同 中村文二郎
 平壤支局勤務を命ず(十二月十一日附)
 經濟部勤務副参事 小野勝三郎
 經濟部勤務を命ず
 經濟部同 浦上 冬彦

同 浦上 冬彦
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎
 同 野中 一郎

同 生長 靖司
 井出武三郎
 林 俊朗
 林 徳藏

同 竹内 貞一
 江藤 恭次
 寺西 博
 吉武 雪生

同 持田富三郎
 山本才一郎
 後藤 輝彦
 中野 嘉男

同 山本才一郎
 後藤 輝彦
 中野 嘉男
 白川 光石

同 山岡 孝光
 佐藤 俊子
 務田 康子
 鶴澤 讓子

同 三輪 啓
 永田 稔
 山田とし子
 山本はつゑ

同 村上 春美
 南郷 清隆
 吉田美代子
 山川 利子

同 加藤千恵子
 藤野 繁子
 山村 妙子
 田路 操

同 鈴木智恵子
 星 園子
 小木會政兒
 岩尾 由夫

同 井田 一生
 高柳 淳雄
 濱 正吉
 山内 省三

同 三浦 嘉平
 德永 永勳
 清水 英子
 平山 富子

同 松田 媛子
 喜美子
 貝山みや子
 生野 清子

同 加藤 フミ
 八代ヒサ子
 三輪ツヨ子
 板倉美代子

同 岡本喜美子
 尾中 一夫
 池下 進
 館 清一

同 安部 千織
 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一

同 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一

同 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一

同 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一
 康原 文一

同 船平サダ子
 依願解職(十二月十五日附)
 同 依願解職(十二月十五日附)

同 依願解職(十二月十五日附)
 同 依願解職(十二月十五日附)
 同 依願解職(十二月十五日附)

出版部だより

一種々の事情で發賣が意外におく
 れてゐた昭和十九年版「同盟時事
 年鑑」も漸く一月二十日過より發
 賣されることになった。豫約者には
 至急送本の豫定である。賣價五
 圓二十九銭。
 △同盟戦時特報第二〇輯として、
 厚生省勤勞局勤務員第二課長國鹽耕
 一郎氏の筆になる「決戦國民勤務員
 が、時局の緊急要請に應へて公刊
 された。本書は一億總員戰闘配置
 への當局者による具體的な手引書
 として懇切丁寧を極む。知友知
 人にひろくおすすすめ願ひたい。
 △製版および検閲のため多大の日
 子を費した内經部編になる「國語
 南方共築園」が漸く印刷完了、二
 月初旬には公刊のはずである。A
 5判二九〇頁、初版五千部、賣價
 三圓二一銭。

同盟學寮の朗景

勤勞の疲れも吹つ飛ぶ演藝會の爆笑

本社青少年の生活道場として規律ある指導と錬成に努めてゐる同盟學寮にも毎月一回の楽しい御馳走日がある。昨昭和十八年四月以來のものも挙げて左のごとくである。

- 四月廿九日 天長節祝賀會
- 五月廿七日 海軍記念日
- 六月三十日 大祓日
- 七月廿五日 同盟講習所創立記念日
- 九月二日 岩永前社長を偲ぶ日
- 九月廿三日 正則第二中學創立記念日
- 十月十三日 東久邇宮家御慶事奉祝
- 十一月十四日 海軍戦捷祝賀



心に鞭打つて學業に、朝は學寮の行事に、引締つた生活の躰を續けてゐる。毎朝合唱して奉唱する明治天皇御製
ことしげき世に立たぬまに人はみな學の道にはげめとぞ思ふの御旨實踐に努めてゐるわけである。朝夕集團生活の特長を受入れることにより寮の青少年はみんな朗かであり、和衷協同の精神に富んでをり、成長期の身心をもつとも健全に養ひつつあるのである。學寮は温い親心で同盟若人の生活をみまるところであり、同盟青少年には楽しい我が家である。そして毎月一回の御馳走日は、とりわけ愉快なト時を送る楽しい日である。(寫眞上は今岡正則中學校長の訓話、下は演藝會に笑ふ寮生の朗かな表情)

互助會報告

【昭和十八年十一月分】

- △結婚
上澤光司 (編輯局)
井上庄二郎 (同)
岡村治恭 (同)
瀬戸晋 (同)
鈴木建 (經濟局)
中島すみ (聯絡局)
寺田久太郎 (海外局)
山田正作 (聯絡局)
前田吉徳 (編輯局)
深野キツ子 (大阪支社)
濱田源四郎 (關門支社)
吉川金一 (仙臺支社)
西村幸男 (京都支社)
三原一正 (福岡支社)
- △出生
三宅勇藏 (編輯局) 長男
神秀雄 (同) 三女

- 上村邦之丞 (海軍報道班) 長女
- 田中眞清 (バンジエ) 二女
- 山崎紀雄 (編輯局) 二女
- 根津知好 (編輯局) 二女
- 久原青男 (總務局) 二女
- 大谷弘 (經濟局) 二女
- 伊藤忠雄 (海外局) 同
- 岡澤孝晴 (總務局) 長女
- 明峰嘉夫 (編輯局) 同
- 篠塚幸雄 (經濟局) 長男
- 阿部隆 (編輯局) 次女
- 良夫 (大阪支社) 次男
- 清澤止次 (關門支社) 長男
- 高松義一 (豐原支社) 同
- 横岡藤次 (青森支社) 長女
- 杉山茂夫 (靜岡支社) 長女
- 黒崎信由 (岡山支社) 次女
- 仲宗根朝松 (那覇支社) 同
- 何再興 (臺南支社) 長男
- △應召・入營
高橋正則 (編輯局) 同
- 大鳥惣平 (聯絡局) 同
- 中村嘉太郎 (編輯局) 同
- 岡松正三 (海外局) 同
- 松下健太郎 (總務局) 同
- 奥澤繁 (聯絡局) 同
- 丸山良一 (編輯局) 同
- 山中福一 (關門支社) 同
- 小池友吉 (山形支社) 同
- 穂苅吉男 (花蓮港支社) 同
- 浦野正男 (清津支社) 同
- 岸田皖光 (中支總局) 同
- 平澤直之 (編輯局) 同
- △見舞
歌橋淑朗 (編輯局) 病氣
- 長田政次郎 (同) 災害
- 松尾信 (聯絡局) 同
- 根津知好 (經濟局) 病氣
- 佐藤百合 (海外局) 同
- 國頭喜治 (聯絡局) 夫人病氣
- 長尾庸四郎 (海外局) 同
- 篠山勇 (編輯局) 病氣
- 大場健次 (編輯局) 夫人病氣
- 關光雄 (經濟局) 子供病氣
- 吉川吉太郎 (編輯局) 病氣
- 東海清 (大阪支社) 同
- 大橋博 (同) 夫人病氣
- 河合勝久 (同) 災害

同盟講習所で 女子生養成

速記・電文・電信・邦文タイプ

同盟講習所では去る十月初めから女子の速記講習および電文講習を開始してゐる。
△資格 高女卒
△時間 午後五時より八時まで
△場所 上智大學内
目下毎日六十名以上の講習生が

熱心に通學、練習にいそしんでゐる。また本年一月からは邦文タイプの講習を開始するが、引き続き来る四月には女子電信の講習をも開講する予定である。なほ来る四月の新學期には速記科生も再募集する筈である。かくて女子報道戰士の大量養成をめざし思想戦の本舞臺で訓練の上、地方へ送り出す意向である。
女子寮も十二月から開設されてゐるから總支社局からも優秀な志望者を推薦して頂きたい。

- 敦 淑三 (同) 同
- 正木和雄 (同) 病氣
- 鈴木博三 (同) 同
- 平野喜代治 (同) 同
- 東村種一 (同) 同
- 梶川博 (名古屋支社) 同
- 山崎薫 (福岡支社) 同
- 松山時平 (札幌支社) 長男病氣
- 丸山三郎 (同) 夫人病氣
- 中井尚明 (京城支社) 長男負傷
- 岡本清吉 (函館支社) 病氣
- 青嶋大道 (京都支社) 同
- 木下謙三郎 (神戸支社) 夫人病氣
- 小松義明 (廣島支社) 病氣
- 中川正弘 (高松支社) 同
- 倉根基次 (岡山支社) 同
- 小倉正久 (長崎支社) 同
- 前川春吉 (熊本支社) 同
- 今泉善次郎 (平壤支社) 同
- 山下哲一郎 (臺中支社) 同
- 藤原元一 (濟南支社) 同
- 入澤文明 (中支總局) 同
- 吉田滋子 (同) 同
- 澤入猛次 (同) 同
- 大塚嘉次 (同) 同
- 平野正一 (臺南支社) 夫人病氣
- 小林サワ (編輯局) 病氣
- △弔慰
上垣三之 (聯絡局) 二男死亡
- 寶達守一 (編輯局) 夫人病氣
- 大勝慶藏 (總務局) 實父死亡
- 河本貞雄 (大阪支社) 夫人死亡
- 岩田理之助 (同) 實兄死亡
- 吉田久彌 (秋田支社) 實母死亡
- 島田茂明 (富山支社) 同

△退社
水口萬 (大阪支社)
吉田幸子 (同)
達泰忠 (同)
片岡敏子 (同)
飯塚静子 (同)
塚田清 (名古屋支社)
柴田さめ (神戸支社)
酒井晴集 (高知支社)

合計 件数 一一一件
金額 七、七〇〇圓

松井善四郎氏餘榮
勳六等を賜ふ
舊臘二十一日香港總督部より同盟香港支局に通達されたところによると昨春福岡において病歿(戦病死)された松井善四郎氏(本社員)は香港總督部新聞班長在職中の功績により行賞の恩命に浴し、昭和十八年十月六日附をもつて勳六等瑞寶章を賜つた趣である。右はひとり故人の餘榮たるのみならず、同盟全社員もこの光榮を頌したる次第で感激の外なきところである。